

世代間の異なる個性と伝統を
継承する壮大なるプロジェクト——

メートル・デュ・タン

Steven Holtzman & Peter Speake-Marin

スティーブン・ホルツマン&ピーター・スピーク・マリリン

手前はメートル・デュ・タンを設立したスティーブン・ホルツマン氏。アメリカで時計の卸売りと小売りから始め、1997年に会社設立。スイス高級時計の販売代理店として北中米で成功を収める。奥はプロジェクトの調整役として活躍したピーター・スピーク・マリリン氏。

吉江正倫: 写真 鈴木幸也(本誌): 取材・文

Photographs by Masanori Yoshie Text by Yukiya Suzuki (Chronos-Japan)

昨年4月、ジュネーブで発表されたメートル・デュ・タン「チャプター・ワン」。今回、同ブランドの社長であるスティーブン・ホルツマン氏と開発者のひとり、ピーター・スピーク・マリリン氏が同モデルおよび今年のパーゼルワールドで発表される「チャプター・トゥー」とともに来日した。

「実はワンよりトゥーの方が先に開発が始まりました。ワンのキャリバーがSHC02で、トゥーがSHC01なのはその証拠です」(スピーク・マリリン氏)。クリストフ・クラレーが中心となって開発したワンは、トゥールビヨン



備えたワンプッシュクロノグラフに、クラレーの得意とするローラーバース式のムーブメントと曜日表示を備えた複雑時計である。一方、トゥーは、ケース形状やデザインはワンを踏襲しているが、より小型化され、機能もトリプルカレンダーに簡素化された自動巻きに変更されている。

「トゥーはヴォーシエの自動巻きをベースに、ビッグデイトとふたつのローラーバースで月と曜日表示するトリプルカレンダーです」(ホルツマン氏)。

一見、シンプルな機構に思えるトゥーがワンよりも開発に時間がかかったのはなぜなのか？

「クラレーとともに開発したワンは、機械式時計に精通した愛好家向けに、できる限りのことを実現しようとして、複雑機構を盛り込んだものですが、優秀な時計師とエンジニアがいたので、その開発は比較的スムーズに進みました。一方、最初からある程度の本数を想定していたトゥーは、クラレーではなく、工業的により製造キャパシティが大きいヴォーシエと共同開発しました。より多くのものを高い品質で作る



チャプター・ワン

6時位置にトゥールビヨンを備えたワンプッシュクロノグラフ。センターの赤い針はクロノグラフ秒針で、12時位置に60分積算計を配す。3時位置の日付と9時位置のGMTを小ログロードで表示。4つのプッシュボタンは修正用コレクター。今年のパーゼルワールドではラウンドケースモデルも発表するという。18KWG(縦62.60×横45.90mm、厚さ14mm)、手巻き(Cal.SH002)。2万1800振動/時。パワーリザーブ約60時間。4158万円。

ためには、複雑な高級時計とは違ったアプローチが必要であり、その設計と開発には想像以上に時間がかかったのです」(スピーク・マリリン氏)。

今後も著名な独立時計師とコラボレーションすること、「チャプター・シックス」まで予定しているとホルツマン氏は言う。

「独立時計師は、強い個性と高い実力があるからこそ、独立できるわけで、そんな彼らをまとめるのは、ある意味、矛盾しているかもしれません。しかし、ワンの開発に携わったロジェ・デュブイ氏、クラレー氏、スピーク・マリリン氏を例に挙げるまでもなく、時計の世界では世代間で伝統を継承することが非常に重要であり、また難しいことでもあります。私は時計師ではありませんが、いわば「料理人」のようなプロデューサーとして、このプロジェクトを通して、少しでもその継承に貢献できれば幸せであり、光栄なのです」

現在、8人の独立時計師とのプロジェクトが進行中というが、その根底にあるホルツマン氏の哲学とその意義には共感を覚えずにはいられない。